



TITLE:

コメント 2

AUTHOR(S):

中村, 龍兵

---

CITATION:

中村, 龍兵. コメント 2. 京都大学高等教育研究 1996, 2: 27-28

ISSUE DATE:

1996-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53476>

RIGHT:

## コメント 2

中 村 龍 兵（毎日新聞編集委員）

中村です。私以外は全部大学の先生で、なんでこんなところに引っぱり出されたのか、いまだに戸惑っております。先生方のおっしゃったことに、とてもコメントする力量はないんですけども、ただあえて、お聞きしたところだけで、感想を言わせていただきます。

一つは、まさしく今栗本先生がおっしゃったように、大学と外との関係。そのへんの話がもうちょっと、意識されてしかるべきじゃないかということを思います。

もう一つは、僕が大学の取材をやっているとどうしても対象は私大が多くなるんですけども、私大の現場あたりで、例えば京大の教授システム開発センターというようなものに、もし期待するとしたらその私大の問題意識とはずいぶんかけ離れているなあという気がします。

ご紹介いただいたように、5年ぐらい大学の取材をやっているものですが、実は新聞記者としてのキャリアがもう少ししたら終わりなんで、ふりかえて今考えているようなことをちょっとお話ししたいと思います。コメントということになるかどうかはわかりませんが。それから今日のテーマは「どのような人間の育成を目指すか」ということなんですけれども、僕なんかとてもそういうおこがましいことは言えないんで、むしろ社会というか大学教育の受益者の立場から、どういう大学であって欲しいかというふうに言いかえて考えたいんですけども。

突然話がとびますが、新聞記者のキャリアを終わるということもあって、どうも最近回顧的になっているんですけども、戦後50年ということを考えると、非常におおざっぱに言えば、戦後50年の日本というのは企業本位の社会だったと思うんです。その中で大学というのは企業の、侍女の役割だった。結局そうだったという感じがします。一般の市民の考え方・行動も企業のエトスというようなものが、覆い尽くした。そういう時代だったんじゃないかという気がします。企業のエトスとはどういうことかと言いますと、これは私は学者じゃありませんので綿密な定義なんかできないんですけども、経済的な利益を優先するとか、あるいはその利益のための合理主義がはかれるとか、そういうことだと思います。これは戦前の社会が、合理性を無視した精神主義みたいなものだったことの強烈的な反省であって、それから言うとは一定の進歩だったと思います。

また、僕も新聞記者生活をふりかえてみても、要するにいろいろな理念だとか、あるいは計画だとかいうものを聞いていて、やっぱり一番すぐ先に考えるのは、それにはカネとかモノの裏付けがあるかということ。そういう裏付けのないものというのは、ちょっとマイナーであるという判断をしていたと思います。しかし、非常におおざっぱに手短かに言うと、その企業のエトスみたいなものが、このところにきて揺らいでいるというか、あるいは前面から退いているというか、そういう時代に来ているんじゃないかと思います。

さっき寺崎先生が、経済界の要望なんかが変わってきたということをおっしゃったんですけども、これは経済界自体もそういう、仮に企業のエトスというようなものを考えますと、それに対して自信を失っているというか、ちょっとこのままではだめじゃないかという感じにおちいってきているんじゃないかなあという感想を持ちます。

この意味で、オウムの事件は象徴的です。オウムの事件でよく言われるのは、いわゆる理工系エリートというか、そういう人たちが、つまり理工系のテクニカルな知識を非常に積み重ねたにもかかわらず、なぜあんなことをしたか、ということです。そういうことが我々にとって非常にショッキングだった。これは最近ある週刊誌で読んだんですけども、麻原の運転手をしてたという35歳の青年がその年齢までに1000万円貯めた。何か商売を開業しようと思っていたんです。ところがその1000万円をお布施でボンと投げ出したという話があります。これは僕ら年上の世代にとっては、非常に驚く話です。35歳で1000万円を貯めるというのは、やっぱり今の社会でもかなりきついだろうと思います。そして青年は企業のエトスのようなものを非常に身につけた人なんじゃないかと思います。そういう人までが、何ていうか、心の渇きというか、そういうものを感じる、というようなことが、僕には非常にショッキングです。つまり、カネとかモノだけでは、生きていけないということが若い世代に強く意識され始めた、という気がします。

最近これもまた別の雑誌で読んだことなんですけれども、京大の佐和隆光さんが戦後50年をふりかえて、おおざっ

ばに言って、高度成長が始まるまでの、日本人の『宗教』はマルクス主義ないしその亜流だった。高度成長が始まってから以降は、その『宗教』は「追いつけ追いこせ」だった。ところがその「追いつけ追いこせ」が今はだいたい達成された。そういう後で日本人の『宗教』はなくなった。今は何もない、というようなことをちょっと書いてらっしゃった。

非常に回り道をしましたけれども、僕などが、大学に期待するものというのは、そういう日本人の心を占めていた、企業のエトスみたいなものが失われたあとの空洞を埋めるものを、大学が市民に提供するということが、期待できないだろうかということです。現状の大学ではそれどころではないということがあるかもしれませんが、ちょっとそういうことを考えます。今大学というのは、少なくとも量的にはものすごく拡大していますし、同世代の半数近くが来るということだけでも影響力があるわけですが、そういうところで、いわゆる佐和さんの『宗教』とか、あるいは僕が勝手に名付けた企業エトスというようなものに代わる、大学のエトスというか、そういうものが世の中にもう少し広がる可能性がないのか。外からの勝手な期待で言うと、そういうものが発信できるような大学であって欲しい、というふうに感じます。

大学ウォッチャーとして今の大学改革を見てると、今一生懸命大学がやっているのは、まさしく企業エトスの後追ひみたいなことです。つまり、企業エトスからいったら、大学はものすごく遅れていて、一周遅れのランナーみたいなもので、とにかく合理化できることは合理化しようというのが今の動きだと思います。当面はそれでいいんじゃないかなあというのが、僕なんかの記事を書いたスタンスなんですが、さっき言いましたような願望で言うと、果たしてそれだけでいいんだろうかという気がします。企業のエトスに代わる大学のエトスみたいなものが生み出せないか。具体的にはどんなことを考えているかという、例えばNGOだとか、あるいはボランティアとか、言われるところの非営利団体、非営利活動とか、そういうものの輪をもっと広げるような、その中心に大学があるような、そういうふうな社会を考えられないだろうかという気がします。あるいは別の言い方をすると、知の消費活動。『知の生産活動』という本が戦後ずいぶん出ましたが、あれも実際に『知の生産活動』する人は、そんなに多くないはずなのに、本だけはものすごく出たというのは、やはり戦後日本人が、僕の言葉で言えば企業のエトスみたいなものに相当とりつかれていた証拠じゃないかという気がします。「知」というのは消費の対象であってはいけないのか。若い人を見てると、例えば音楽に対する関心とかは非常に高いわけですが、サブカルチャー的なものも含めて、ハイカルチャーの「知」の楽しさというものを大衆的に広めていく中心に大学はある、というふうなことが期待できないだろうか。たいへん甘いかもしれないけれども、まあ一応大学ウォッチャーをやってきた私としては、そういうふうな願望を含めて考えるわけです。

新聞記者としてというよりも、一人の市民としての願望を話したわけですが、現在の進行中の大学改革ということについてコメントすると、今のところ、大学改革は前半というか前の3分の1という、そういう段階かと思っています。今までを前半とすれば、非常にどぎつい言い方をしますと、今までのところ教員にアメをねぶらせるという、か、教員にとってある程度得になるという部分が、どんどん先行してきたという気がします。これから起きることは、むしろ教員にとっては厳しいことがいろいろと起きてくるのではないかと、という予測をいたします。任期制なんていうのはたぶんそんなことではないか。任期制が実際にどういうふうに具体化されるかというのは、ちょっと見当がつかないんですが、ただ僕の感想で言えば、任期制よりも、いわゆる公募制というんですか、それを完全実施するというようなことを、もうちょっと徹底したほうが、実質的なんじゃないかなという気がします。どこそこの大学で、こういうキャリアあるいはこういうことを教えられる人を募集しています、というようなことが新聞広告でどんどん出ると。そういうことになればいいんじゃないかなと思います。そうすると、日本では大学ジャーナリズムというのはなかなか確立しませんが、そういう広告が出ることで大学ジャーナリズムも成立するんじゃないかなあ、というふうなことを考えています。ついでに言うと（これだけ自分が下手なプレゼンテーションをしたうえで言うのはへんですけれども）採用にあたっては、教育能力を試すという意味で、公開のプレゼンテーションぐらいはやってほしいんじゃないかなあ、という夢を持っております。